

むほん

第14話 足利尊氏の謀反

ちゅうこう

中興の政治が失敗して、武士の間に再び武家政治をと思ふ者が多くなる。

足利尊氏はこの形勢を見て、起って鎌倉に據って謀反し、ほしいまゝに征夷大將軍と僭称する。大軍を率いて西上し、一旦京都を犯すが、忽ち大敗して九州に奔る。

足利直義が成良親王を奉じて鎌倉を逃出した後へ、北條時行はその軍を率いて入った。建武2年7月28日の事で、彼の父の執権北條高時が亡びてから2年2ヶ月の後に、再び北條氏が鎌倉の支配者となりました。

尊氏、東国に下る

この時、足利尊氏は京都にいましたが、三河の矢矧まで逃げて来た直義から鎌倉の騒乱を注進されると、直ちに上奏して、自ら兵を率いて東国に下り、弟直義と力を協せて時行を征伐したいと願ひ、且つその出陣の際には、頼朝の例に倣って、征夷大將軍、総追捕使に任ぜられたいと願った。しかし、朝廷では折角政権を回復なされたところですから、今更これをお許しになる筈がない。8月1日には、却って成良親王を征夷大將軍に任じられて、尊氏にはお許しにならないことを明らかに示された。すると尊氏は怒って、その翌2日、勅許のないにも拘らず、勝手に兵を率いて京都を出発した。予ねて恩賞に対して不平を懐いていた武士らはわれもわれもと喜んで彼に従ったので、京都を出る時には僅かに500騎に過ぎなかった軍勢が、駿河に着いた時には30,000騎になっていた。

中先代の乱

尊氏は三河の矢矧で直義と会って、それより2人は馬首を並べて東に向かい、先づ遠江の橋本で敵兵を撃って走らせたのを手始めに、駿河、相模の各所で連戦連勝して、8月19日には早くも進んで鎌倉に入った。その前日に北條時行は逃げたが、彼に組した者は或いは自殺し、或いは降り、或いは逃亡したのです。時行が鎌倉を占領してから僅かに20日にしかならなかつたので、世にこれを二十日先代の乱、または中先代の乱という。ここに何々先代というのは、足利氏が自ら北條氏の後継者を以って任じて、北條高時以前を先代と見做し、自分らを後の代と称したために、その中間に現れた北條時行の鎌倉幕府を中先代または二十日先代と呼んだのに基づきます。

尊氏の声望

これより先き、後醍醐天皇は足利尊氏が京都を出発した後8日目、即ち建武2年8月9日に俄かに尊氏を征夷將軍に任じられたが、今また、北條時行の乱が平らいだことをお聞きになると、8月30日にその勲功を賞して、従二位に叙せられると共に、わざわざ勅使を遣わして、「東国の逆徒が速やかに鎮定したのは誠に喜ばしい。軍兵の行賞は、早速京都において宛行うから速やかに帰るように」という勅旨を伝えられた。勅旨も待たずに勝手に出発した者に対して、後から征夷將軍に補されたり、あわて

第14話 足利尊氏の謀反

て勲功を認めて、わざわざ勅使を立てられたりした事は、寧ろ当を失したもので、朝廷の権威を傷つけたものと思われるが、これをしなければならなかったところを見ても、いかに尊氏の勢力が強く、朝廷が彼に叛かれることを恐れていたかが分かります。

尊氏、勅命に背く

さて、尊氏は勅命を受けると、これに従って京都に帰ろうとしたのですが、この時、弟の直義はこれに反対して兄を止めた。彼はそのわけを述べて、「先に高時が亡びて天下が統一したのは、主として足利家の武威に依るのである。然るに、京都に於いては、公家や義貞らがしばしば足利家に対して陰謀を企てた。これまでわれわれが無事に免れたのは全く運が良かったのです。折角そういう大敵の中を遁れて関東に来たのに、再び危険な京都に帰って行くのは愚かなことである」と言って固く兄を諫めたので、尊氏もついに勅命に背いて鎌倉に留まり、若宮小路の代々將軍家の屋敷地に新しく邸宅を造って、高師直以下の諸将にもその周囲に邸宅を造らせました。

征夷大將軍を僭称する

かくして尊氏は鎌倉に永住の計画を立てると、朝廷には申し上げずに、勝手に部下の者に恩賞を与え、寺院に土地を寄進し、一族の斯波家長を奥州管領に任じて、関東から奥羽の地を悉く自分の手に収めようとしたのみならず、新田義貞の領地である上野国を奪って一族の上杉憲房に与えたりして、全く將軍の実権を取行なったが、ついにその十月には、あつかましく自分で勝手に征夷大將軍と称したのがあります。

けれども、彼は朝敵といわれることをば非常に恐れたので、11月の初めに、弟直義の名を以って諸国に書面を送って、新田義貞を討つための兵を募り、その18日には、づうづうしくも義貞の罪惡と称するものを掲げて、この追討のお許しを天皇に願い出た。

尊氏追討の詔下る

しかし、彼の謀反は既に明らかであったのみならず、護良親王を殺した事も、この頃は既に京都にわたっていたので、天皇は大いに怒られて、即ち尊氏の官位を削り、これを追討せしめるために、皇子尊良親王を上將軍とし、新田義貞を大將軍として、東海、東山の両道から鎌倉に向わせられ、同時に陸奥の北畠顯家に急使を立てて、背後から鎌倉を攻めさせることにした。

新田義貞は六万七千余の兵を率いて東海道を進んだが、11月25日に三河の矢矧川に尊氏の前軍を破り、12月5日には直義を駿河の手越河原に破って、その勢いは破竹の如く、臙て箱根の嶮を突破しようとした。

官軍、竹の下に敗れる

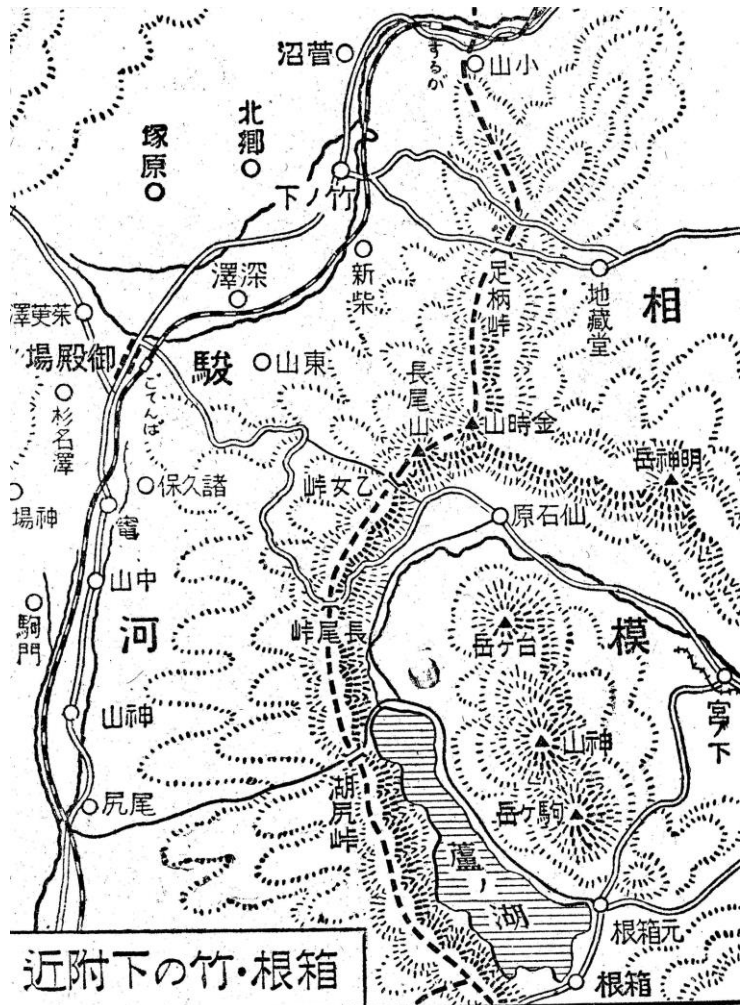
足利尊氏は、この時まで鎌倉に在って様子を観ていたのですが、東海道の戦いが全く身方の敗北に終わり、官軍が近く箱根に迫って来たと聞くと、俄かに起って、大軍を率いて鎌倉を出発した。この時、

第14話 足利尊氏の謀反

箱根の嶮は既に直義が拒いでいたので、彼はわざとこれには向わず、足柄峠を踰えて竹の下に出た。

この方面へは、新田義貞の弟の脇屋義助が尊良親王を奉じて進んでいたが、その軍勢が少なかったので、12月11日、尊氏の大軍に攻寄せられると、忽ち非常な苦戦に陥り、辛くも佐野山というところまで退却した。ところが、その翌12日の戦いに身方の陣から尊氏に内通する者があった為、ついに大いに敗れて退いた。

一方、箱根に直義を攻めていた義貞の軍は大いに優勢であったのだが、竹の下の軍が敗れたと聞くと、落胆して逃げ去る兵士が少なくなかった為、義貞もまた余儀なく軍を班して、ともかくも一先づ伊豆の国府 -- 今の三島市 -- まで退いた。



尊氏らの西上

尊氏はその後から伊豆の国府に入ると、ここで直義と将来の策を定めた。彼は、子の義詮を鎌倉に留めて関東を取り鎮めさせることにし、自分は直義と共に兵を率いて義貞を追うことにした。彼が専ら義貞を当面の敵としてこれを討とうとするのは、護良親王がお薨れになった後の公家方の武将の中で、義貞は彼と同じく源氏の子孫であって、最も名望が高かったからです。尊氏は、自分が將軍となって武家政治を開くためには、先づその邪魔になる公家方の武士 -- 義貞のような天皇に忠義を尽す武士 -- を除かなければならないと考えたのであります。

天竜川の船橋

さて尊氏らは官軍の後を追って天竜川まで来てみると、立派な船橋が架けてあって、渡守が番をしている。天竜は音に聞こえた大河ですから、尊氏は容易には渡れまいと心配していたので、これを見て不審に思い、誰が橋を架けたのかと尋ねた。番人らは、「先達て新田殿がここに来られて、敗軍とはいえ大変であるから、馬では渡せない。船で渡しては遅くなって、若しや身方を一人でも失っては不憫であるとして、急に船橋を造られたのです。架けるのには2,3日かかりました。

名将新田義貞の人柄

新田殿はご軍勢を5日5夜にわたって渡らせてから、最後に自分がお渡りになったが、その時、部下

第14話 足利尊氏の謀反

かたたち す き お よしただ た かえ おお
の方達が、この橋を直ぐに切り落とすように命令しますと、義貞公は橋の中ほどから立ち帰って、大いに
りっぶく め おお われわれ
立腹なされて、わたくし共を近くに召されて、仰せ聞かされるには、敗軍の我々さえ架けて渡る橋を、い
かに切り落としたとて、勝ちに乗った関東勢が架けることは目に見えている。 義貞の身としては、敵と
ても架けて渡るべき橋を切り落として、急に襲われたのにあわてたなどと言われては末代までも口惜しい。
まえたち お
お前達はよくよく橋の番をして居れと言って、静かにお渡りになりました。 ですから、ご軍勢をお待ち
していただきます」といったので、これを聞く人々は皆涙を流して、弓矢の家に生まれた者は誰れ
よしただ めいしょう かんたん よしただ ひとがら
しもこうありがたい、義貞は本当の名将だといって、感嘆し合ったということです。 義貞のゆかしい人柄
つた た
を伝えるに足る話であります。

たかうじ ことごと つきしたが み の
こうして尊氏が東海道を西上すると、関東及び海道の武士らは悉くこれに附従ったので、美濃に
入った頃には既に数十万騎の大軍となり、山をも野をもただ一撫でに風靡せんばかりの勢いでした。 十
せんじん おうみ たつ
二月三十日にその先陣は近江に達した。

ろくじょうただあき なわながとし ゆうきちかみつ せた くすのきまさしげ うじ ふせ
この時京都では、六條忠顕、名和長年、結城親光らに勢田を守らせ、楠木正成に宇治を防がせ、新
よしただ よど わきやよしすけ やまざき ま かま たか
田義貞に淀を、脇屋義助には山崎を固めさせて、都へは1騎も賊兵を入らせまいと待ち構えていた。 尊
うじ せた ただよし こうのもろやす むか よど はたけやまくにきよ
氏もまたその軍を分けて、勢田へは弟の直義及び高師泰を向わせ、淀へは畠山国清を向わせ、自分は
うじ む
宇治に向かうことにした。

官軍の防備

せた せた げきせん
戦いは瀬田（訳注：勢多）の方面から始まって、正月元旦から毎日激戦が行われたが、この方面の官
よ すこぶ いき さか たかうじ くすのき ひか
軍は善く戦って、頗る意気が盛んでした。 尊氏は一旦宇治へ向おうとしたのですが、楠木の軍が控え
にわ はたけやまくにきよ おおわた
ているのを見ると、俄かに予定を変えて、これには畠山国清を当らせ、自分は主力軍を率いて、淀の大渡
よしただ
りにある義貞の主力に向って行った。 正月9日、10日の2日にわたってこの方面でも非常な激戦が行
よしただ
われたが、義貞の軍が善く戦って、関東勢は一步も進むことが出来なかった。

細川・赤松らの叛

か たかうじ そむ はる へい あ ほそかわちようぜん
ところが、予ねて尊氏が東国に叛いた時から、遥かに兵を挙げてこれに応じていた讃岐の細川定禪と
あかまつのりむら のりすけ たかうじ
播磨の赤松則村の子の範資とが、この時、四国及び中国の大兵を率いて摂津から進んで来て、尊氏の軍と
ぼうび てうす じょう はげ わきやよしすけ
連絡すると、山崎口の防備の手薄なのに 乗じて烈しくこれを攻めた。 この方面の主将の義貞弟脇屋義助
そうへいども ぞく め あま てき たいぐん おそ
はよく防いだが、公卿の家来や僧兵共のその手に属していた者が、目に余る敵の大軍に恐れをなして続々
だ たいきやく
と降参し出したので、ついに敗れて退却しなければならなくなった。 この時までも、他の方面はすべて
かんぐん ゆうせい くず ぞくぐん らんにゆう よしただ み あん
官軍が優勢でしたが、この一角の崩れから京都に賊軍が乱入したので、義貞らは天皇の御身を案じて、
まも す しりぞ
あわてて守りを棄てて退いた。

尊氏、京都を犯す

さわ ひととお ほそかわちようぜん
京都の騒ぎは一通りではなかった。 正月10日、細川定禪らが攻め入ると共に、天皇は、その夜、
なん さ えいざん ぎょうこう ひがしきかもと ひがんにょ あんざいしょ さだ よしただ まさしげ ながとし きくち
難を避けて叡山に行幸され、東坂本の大宮の彼岸所を行在所と定められた。 義貞、正成、長年、菊池

第14話 足利尊氏の謀反

たけしげ ゆう き ちかみつ まも
武重、結城親光らがお護りした。

一方、京都に乱入した賊軍は、その夜、火を諸方に放って乱暴を働いたので、内裏を始め公卿や武家の邸宅なども一時に焼け落ちた。尊氏はその翌11日に数十万騎を率いて京都に入った。

北畠頼家の尊氏追尾

これより先、陸奥の北畠頼家は、新田義貞と力を協せて足利尊氏を討てとの勅を受けると、義良親王を奉じて陸奥を発し、建武2年12月の末に、背後から鎌倉を攻めようとして来て見ると、尊氏らは既に箱根、竹の下の戦いに勝って京都に向った後でした。さらばその跡を追えと、夜に日を継いでこれを追ったが、ついに間に合わないで、尊氏が京都に入った翌々日に頼家は近江に着いて、その翌日の正月14日に琵琶湖を船で渡って、東坂本の行在所に参った。その軍勢は50,000余騎であったといわれる。

官軍の勢い振るう

官軍はこれがために勢いを盛り返して、正月16日には早くも足利軍に身方している三井寺を攻めた。大將は義貞、頼家らでした。尊氏も、細川定禅らを遣わして三井寺を援けさせたが、官軍の勢いが強くてついに火を佛堂に放ってこれを焼き払った。義貞の軍は勝ちに乘じて京都に攻め入り、大いに足利勢を駆破って追散らした。けれども、敵の何十万騎に比すれば身方は何十分の一にも足らぬ小勢であって、後には続く兵が無かったので、義貞はその日の暮れに坂本に引き返した。京都はやはり尊氏が占領していた。

尊氏、敗れて九州に奔る

そうこうしている処へ、去年の11月に義貞が東海道を進んだ時に東山道から鎌倉へ向った洞院実世の軍が、信濃から引き返して、正月20日に東坂本に着いたので、官軍の勢いはますます盛んになった。かくして正月27日に官軍は京都に兵を出してから30日までの4日の間、義貞兄弟を始め、正成、長年、頼家、結城親光、洞院実世らの諸將が猛烈な攻撃を続けたので、ついに賊軍は全く破れて、尊氏は30日の夕方に、丹波の篠村に遁れた。彼はその地で陣を立直して、再び京都を攻めようと謀ったが、迎もこのままでは恢復することが出来ないのを悟り、いよいよ退陣と決して、丹波から播磨をまわって2月3日に摂津の兵庫に着いた。

官軍はこれを追撃して山陽道を下って行ったが、2月10日に摂津の西宮の西方で直義の軍を撃つてこれを走らせ、その翌11日に、豊島河原というところで更に大いにこれを破ったので、遂に尊氏は直義と共に船に乗って九州に逃げた。実に建武3年2月12日の事です。

義貞、正成らの諸將は一先づ尊氏討伐の功を終えて、京都に凱旋した。

天皇は2月2日に比叡山から御還幸になって、花山院を皇居とされ、その29日に改元して延元と称された。建武の年号は、武を建てる字ゆえ、其の字の意味が公家に不吉であると思われての改元であったといわれる。かくて天下が泰平に帰すると、北畠頼家はまた義良親王を奉じて陸奥に下った。

第14話 足利尊氏の謀反

足利尊氏の持明院統奉戴の計略

ところで、ここに一つ注意すべき事があります。足利尊氏が丹波の篠村で再び京都を攻めようと謀った時に、このまゝでは逆もだめだという事を悟ったと前に述べましたが、彼は2月2日に、摂津に向おうとする時、薬師丸という供の者を近くに呼んで、「今度、京都の合戦に身方がたびたび負けるのは、戦いの咎では全くない、ひとえに尊氏が朝敵であるからである。されば、いかにもして持明院殿の院宣を申受けて、天下を天子と天子の御争いにして合戦をしようと思う。御身は日野中納言殿に縁があると聞いているが、これから京都に引き返して、院宣を賜るように伺って見てくれ」と密かに言含めて京都に還している。尊氏が朝敵といわれるのを恐れた事は鎌倉にいた時からだが、彼が京都を占領した時には、持明院統の方々も皆難を避けて叡山においでになってしまわれたので、嘗て北條高時が光厳院をお立てした時のようにこの皇統のお方を奉じて政権を執ろうとした当てが外れたのでした。それで、そのまま合戦に臨んだが、朝敵であっては、ついに勝つことの出来ないのがよく分かったので、さてこそ此の汚名を免がれようと、薬師丸を密使に立てたのであります。

光厳院の院宣

こうして、兵庫を2月12日に出発した尊氏が、十五日に備後の鞆の港に着いた時に、持明院統の光厳院の院宣を奉じたお使いが着いた。新田義貞らを誅伐するようにという院宣が齎されたのです。尊氏及びその一党は非常に喜んだ。もう朝敵ではないぞという気分だけでも、どれだけ先が明るく見えなかつたか知れなかつたのです。即ち、尊氏は院宣の名を以って諸国の兵を徴発し、新田義貞を討つ事名として、錦の御旗を軍の先頭に掲げて堂々と九州に下って行きました。

両皇統の争いとなる

既に前にも述べたように、護良親王がお薨れになった後は、公家対武家の争いは義貞対尊氏の争いになっていましたが、今度は、持明院統の院宣が下って、尊氏もまた、ともかくも逆臣を討つという名分が立つ事となったので、ここに大覚寺統対持明院統の争いとも考えられるような形となり、この形勢が次第に進んで、終に後の南北両朝の対立ともなったのです。

(第14話 足利尊氏の謀反 終わり。 次は前頁に戻り、 第15話 湊川の戦い)